
鬼戦記～黒と白～

真鍋 蛍火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼戦記～黒と白～

【ZPDF】

Z0099Z

【作者名】

真鍋 蛍火

【あらすじ】

黒が禁忌とされた時

一人の少女を中心に、復讐の渦が回り出す。

プロローグ（前書き）

始めました。暇潰しにお使いください。

プロローグ

世界を統べる者『十二光使』

彼らは黒を忌み色とし、黒を持つ者を殺した。

生まれたばかりの子でも、王の子でも・・・

黒を禁忌としたのは「力を持ちすぎ」だからだそうだ

黒は力の象徴とされる色

だが、あくまでも黒は『象徴』に過ぎない。
はつきり言つて狂つてる。

だが、人はそれを受け入れた。

その人も狂つてる。

そんな時、鬼神族の王の子が黒を持つて生まれた。

周りの声を恐れた王はその子を殺そうとしたが、王にそのような度胸は無かつた。

その子は城に幽閉され、陽を見るにも無く鬼の歳で6の少年となつた。

その時、城では世継ぎの問題が起きていた。次に生まれた子が知の象徴とされる白を持つ女であつたからだ。

白は禁忌の真逆とされる聖色であつたがその子は女

力の王とされる鬼神の長にはなれなかつた。

そしてマズイ事に黒を持つ子である兄を見つけ、慕い始めた。

黒を持つ子を産み、心労に侵されたままの王妃は白の子を産み、死去

それによつて王は愛する者を奪つた黒と白を國から追放し、
12の黒の子と6の白の子の運命が別れた。

＊＊＊

私の名はリアン。白髪赤目の人間で17の容姿の鬼神だ。復讐の為に、何人も人を殺した。罪悪感はナイ。

一番の目的は兄を殺した『十三光使』4か月前、その9人目を殺した。

10人目を殺すために新たな国へ足を踏み入れた。まずは商店街に入る。

猫を追う子供・買い物客・商人様々な人が居る中近寄りがたい雰囲気を放つ私に声を掛ける男がいた。

「すみません」

「・・・」

無言で横を向くと花屋があり私の目の前で跪すべく青髪青目の中年がいた。そして手に持つ白ゆりを私に向かた。

「この花を受け取つてくれませんか?」

男が女に花を渡す行為は俗にプロポーズと言つ。

期待を込めた青い眼差しを1秒ながめて、地面に転がる小さな石を広い、男の眉間に投げた。

ビシッ！

「・・・！・・・」

男は痛みに悶絶しながら額を押さえた。

「・・・つ・・・・！・・」

私は心から溢れる何かを抑え、宿に向かつた。

プロローグ（後書き）

末永く読んでもらえるとありがとうございます。
お付き合いをよろしくお願い致します。

青き青年

僕はギルバート。青髪青目の中身のキングエルフだ。キングといつても王位は弟に押し付けたし、大した事のない男だ。人間の容姿で20歳ぐらいだね。

あ、言い忘れたけどエルフといつても耳は尖ってないよ。魔力沢山の人間はキングエルフって覚えてくれていいよ。

そんな僕は家に花でも飾ろうかなーと思って花屋に行つたんだよねーそして花を選んでたら不思議な気を感じて振り向いたら彼女が居ました。

白いショートヘアに赤いギラギラとした瞳、桜をあしらつた衣姿は美しく、僕ビジョンでキラキラフレームがついてました。ひとめで恋に落ちました。

僕は迷いません。声を掛け、その場にあつた白ゆりを手に取り跪づいてこう言いました。

「この花を受け取ってくれませんか？」

すると彼女は石を拾い、僕の眉間に投げました。

ビシッ！

「…………」

痛いです、凄く。悶絶してたら彼女は行つてしましました。慌て追い掛けようとしたらい

「あんた…金を払わないとは…・・・いい度胸だね！」

「「」「」めんなさいー」とポケットから適当な額を出し、駆け出しました。はい、眉間にさすります。

彼女を追っていましたが、複雑な路地で迷子になってしまいました。

* * *

家に帰った時は夜です。白ゆりもしなしなになっちゃいました。魔法で体を清めて、適当に食事しました。ベッドに入りましたがなかなか寝られませんでした。

正しい擊退方法（前書き）

リアン視点

正しい撃退方法

何なんだアイツは！

宿の部屋で、リアンは同じルートを同じ動きでウロウロと徘徊していた。

初対面で名を名乗らずにいきなり求婚してくるなど・・・あれか！アイツは俗称で「女たらし」とかいうヤツなのか！

「ええいー。『晴らし』に外に出るか・・・」

まだ陽が上りきっていない中、リアンは宿の庭にある花壇の前に佇んでいた。

何故だ！ちつとも『晴れんぞ！』寒いし眠いし・・・アイツが頭から離れんぞ！

「やあ、おはよう」

「！？」

気が付いたら横に『アイツ』がいた。

「お～ま～え～！」

自分でも恥ずかしい程に声が枯れていた。言つた事は取り消せないが・・・無かつた事にするぞ。

「えーと、僕はギルバートです。貴女は？」

空気を読め。私が帰れオーラ出しているのがわからんのか

「わ、私はお前どじやれあうつもりはないぞ・・・興味の無い者に、名乗らん」

「・・・・・・・・・・」

何故黙る！私が何か言わねばならないじやないか！

「あー、言つたら帰るか？」

「・・・・はい」

まで、最後凄く悲しいぞ。声が下げ調子・・・私が酷いヤツみた
いじやないか・・・・と、とりあえず帰つて貰つぞ！

「・・リ・・・・アン・・・・よし！帰れ！」

待て自分！何故名前を言つだけでこんなに疲れた！

「リアン・・・貴女にぴったりのいいお名前ですねー」「わかったから帰れ！」

翌日から、ギルなんとかが毎日アタックしてき始めた。

『撃退方法 その1』

石投げる（一回目）

「愛しの由を君、リアン……我が手を……」

ビシッ！

「……う……あ……」

『撃退方法その2』

逃げる

「リアン、おは……あれ？」

『撃退方法その3』

無視

「リアン、よかつたら今日僕の家来ない？」

卷之三

? · · · リアン? · · · · オーイ

「撃退方法その4」

とにかく帰れ・来るなオーテを放つ

「rian! 一緒に花でも見に行かないかい?」

「あれ？ 花・・・嫌い？」

(帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来る
な帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来る
な帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来るな帰れ来る
な帰れ来るな帰れ)

『撃退方法その5』

殺氣を放ちながら睨む

「ねえリアンー」

ジロリ

「やだなー、そんなに見つめないでよ」

【結果】

ギルバートは空氣読めない&、諦め悪い

くそっ！全部失敗した……次の手が思い浮かばん！……………

「私は何故あんなヤツを気にしてるんだ？」

疑問が外部に放出される。

「だいたい、いつもならすぐ邪魔者は消すのに……私はどうした！」

朝っぱらから一人、庭の花壇に叫ぶリアンは他者から見れば異様だ。

「ていうか、アイツもアイツだ！キングエルフなら【魅了】チャームを使えば良いものを……正々堂々落としに来るとは……」いつも清いと腹立たしいぞ！」

「いつもならこの時間に来るのが……

『諦めた』と、結論付ければ良かつたが……リアンにはできなかつた。

「諦めた……のか？……呆れたそ！その様に薄い恋心に……まったく！男なら最後までやり……通……せ……？」

だから何故私は気にしているーしかも思考が矛盾だらけになつてゐるぞ！

「おはよう。リアン

「つー」

来たか元凶ーまた私の思考がおかしくなる・・・

「花を選んでたんだ。」

選ばんでいいーああ、『トイシ』といふところに反応したくなむ・・・

「はー、どうだ。」

ギルバートは跪き、リアンに白ゆりの花束を向ける。同じ様に純粋な笑みもだ。

「白ゆりが氣に入つてもらえなかつたみたいだから・・・リアラにしたよ。」

『リアラ』別の名は【絆の花】又、【愛の花】と言われている形は白ゆりに似ておつ色は純白。

『トイシ！懲りて無い！

リアンが睨んでいるのに気付かず、ギルバートは相変わらずリアラの花束と笑顔を渡していく。

な、何なんだ・・・・・トイシ・・・・花の問題じやなくてお前自身に問題が・・・・

とりあえず石を取り、眉間に投げる

ビシッ！（三回目）

「うう……」

ええええええええええええ！これ三回目だぞーいい加減学習して避
けろよ！

ああ……なんか……

「……う……クク……」

「え？ リアン？」

・・・？・・・私・・今・・・

頬の筋肉が緩んでいる事がわかった。

そう、rianは何十年振りに笑っていた

「つー……お、お前が笑わせ……」

なんで笑ってるんだ！私は！ギルバートが三回も石に当たったから
？避けなかつたから？・・・基本一緒だ！

ギルバートはフリーズしている中、rianの頭に幾つもの考えとツ
ツコミが飛び交う。

その間にクスクス笑っていた事にrianは気付いていない

「……酷い……」

フリーズから解けたギルバートが声を上げる。その声があまりに情けなかつた為、再びリアンの頬を緩める。が・・・

「あ・・・・いや、スマン・・・なんか、いつも容易く受けようとお前はキングエルフだろ・・・・・・・・・・避けるか弾くかすると思ったのに・・・・・三回も受けるなど・・・・・」

頬に力入れ緩みを治して弁解した。正直言うと自分に向けて弁解していた。

「・・・・・・・・

ギルバートは黙つたままだ。呆れられたかもしれない。

きつと心眼を使って心を覗いたんだ。自分に言い訳しているのに気が付いたんだ。・・・あれ?何で言い訳してるんだ?

口々笑み（前書き）

ギルバート視点

|口と笑み

『ビシッ！』（三回目）

「ハハ……」

眉間に走った痛み、またまた石を投げられました。しかも威力が増してると来た。物凄く痛い……

「……う…………クク…………」

「え？ リアン？」

え？ リアン？ ……なになにな！ 『ビシッ！』したの？ ……

「ひー…………お、お前が笑わせ…………」

わらわせ…………え？ 何？ 笑つてたの？ ……

彼女の見せる『きりりない笑み、きつと…………

「キリ^{コトク}は…………ずっと…………笑つてなかつたんだね…………」

「

とても小さな声…………もしかすると声を発していなかつたのかもしない

クスクス笑う彼女の目は優しい赤色だった。今までの血色とはかけ離れている。とてもとても柔らかく、優しく……壊れやすい宝石・ルビー・

この『赤』をずっと見ていていいたい・・・ギルバートは彼女の『赤』を『血』に変えないと誓つた。

「・・フ・・・フフ」

押し殺した笑み

「・・・・・醜い・・・」

せつかく・・・また笑えたのに・・・堪えないでいいんだよ・・・
・・わかつて堪えているのなら・・・・・・・・・
正直、泣きそうだつた。だから声が情けなかつた・・・ほら、彼女
が笑いかけてる・・・情けない・・・

「あ・・・・いや、スマン・・・なんか、いつも容易く受けようとせ
・・・・・お前はキングエルフだら・・・・・・・・・・避けるか弾く
かすると思つたのに・・・・・三回も受けたなど・・・・・」

勘違いさせちゃつたかな?

• • • • •

ど、う、こ、ち、う、・、・、瓶、に、用、や、な、い、・、・、

笑二てもいしんたよ

これがたけが言いたいのは

・・・・・"ゴメン"・・・・・

咲いた心

「はあ……まつたく……お前と戻ると、調子が狂うぞ!」

「なんだ！・・・気持ち悪い・・・」

「あひどい」

『リアラ』の花束を持った白髪の女を見るからに幸せオーラを出す青髪の男、周りから見ればバカツプルだ。そんな二人は街を歩く。

卷之三

「えーと、最初に……うん……どうしようかな？」

「決めてないのか？！」

二

さらりとギルバートの計画性の無さを知つたりアンは呆れる。

まつたく・・・こいつは何なんだ・・・

「だつてさー、『テート』だよ。計画ついらなくない？そひへん歩いて、お菓子食べたり、服見たりー、あ、アクセサリーも選びたいなー」

なんだ、お前は『計画何それ、おいしいの?』パターンのヤツか・・・
・その場で決めるタイ・・・え?

リアンは今言われた事を確認する。

『だつてさへ、『ドート』だよ。計画つていら』

・・・・・でーと・・・・でー・・・・・

「な、なななーお前、今『で』がついて伸ばし棒に『と』のすべ
何かを言わなかつたか！」

「rian、『ー!』じゃなくて『?』だよ。いつにいつ時に使つたのな
「どつちでもいい！」

「ええー、そういう物なのかな?あ、うん、そつだよー僕ちゃんと
『デート』つて言つたよー！」

「な、あ、え?」

rianは魚の様に口をパクパクさせ、顔を真っ赤にする。

え、あ、お、お前正氣か?そつもので氣を許しはしたが・・・・・

『氣を許す』rianにとつては、『あの時』以来初めての事だ。

え、あ、ええつと・・・・・氣を許した・・・・・そだよな・・・・・
・笑つたんだから・・・・・・・・・・・・・・・うん。あいつは・・・・・
・・・良いヤツだ・・・・・・・

魚状態のrianを見て、ギルバートはクスリと笑う。

「ホラ、あつちー服売つてるよー行こ行こー。」

「う、ええいいいいー」

rianの手を掴むとギルバートは走りだす。同時にrianは情けな
い声を上げる。元気なバカッフルを陽は照らしていた。

私は・・・素直じゃないな・・・本当は最初から気付いてた・・・
・ アイツに一目惚れしたって、毎日やつて来るのを楽しみにしてた
つて。なのに・・・笑わせてくれるまで・・・・・・ 知らない振
りして・・・・みつともないな・・・・・・ 私は笑いたかった・・・
・『兄さん』がくれた陽だまりをずっと・・・求めてた・・・
アイツはそれを・・・・・・

「?・・・リアン?どうかした?」

「ううん、なんでもない」

「ん・・・ならよかつた!」

走りながら、前を見ずにギルバートはリアンへほほ笑む、当然、前
を見ていないので盛大に転ぶ事になつた。(すんでの所で手を離し
て良かつた)と思つたのは秘密である。

咲いた心（後書き）

リアンさん

ツン全開だったのね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0099z/>

鬼戦記～黒と白～

2011年12月27日20時48分発行